

聖書: エステル記7章1～10節

説教: いのちを与えてください

はじめに

クセルクセス王の側近であったハマンが、ペルシャ帝国に住むすべてのユダヤ人を根絶やしにするとの法令を発布したことを知ったエステルは、いのちをかけて王のところに向かい、あわれみを求める決心をします。幸いにして王は快くエステルを迎え、エステルが催した宴会にハマンを連れて出席します。エステルの計画では、ここでハマンを告発するつもりだったのですが、ハマンを訴える証拠が手に入らず、結局その日は諦め、次の日にもう一度宴会を開き、そこで話しを切り出すことになりました。

その夜のことで、王が年代記を開くと、モルデカイの手柄によって王の暗殺計画を未然に防ぐことができたという文言が書かれているのを見つけます。聞けば、モルデカイには何も栄誉を与えていないままだという。これはいけない。すぐに栄誉を与えなければと思案していたちょうどその時、王のところに来たハマンにお尋ねになる。「王が栄誉を与えたいと思う者には、どうしたらよいか。」ハマンは、てっきりこれは自分のことだと勘違いして、精一杯の提案をしたところ、結局、ハマンがモルデカイが乗った馬を引き、「王が栄誉を与えたいと思われる人はこのとおりである」と、叫ぶ羽目になってしまった。それが前回までのあらすじです。

今日のところでは、ハマンがさばかれていきます。そこには神の御手が、王とエステルに大きく働いているのは明かです。どのような働きがあったのかを見ていきます。

1 エステル

1) 栄誉を求めていなかった

まず王のほうから見ます。王のいのちを救う重大な情報を伝えたのに、何も栄誉が与えられなかった。王が驚くほどのことなので、栄誉が与えられる側からすれば、普通ならクレームをつけてあたりまえです。場合によっては大騒ぎになってもおかしくない。ところがモルデカイは何も要求していません。これは不思議です。

それだけではない。暗殺計画のことを王に報告したとき、わざわざモルデカイの名前を出して口添えをしたのはエステルだったのです。自分が口添えしたのに、モルデカイに栄誉が与えられないとな

れば、エステルの顔に泥を塗るのと同じですから、エステルから猛烈に抗議されてもおかしくない。ところがエステルも何も言ってこなかった。

2) 際立つ謙遜さ

自然に、前の王妃であったワシュティとどうしても比べてしまう。およそ九年前のことですが、王はワシュティに王冠をかぶって宴会に来るようにと命令したのに、ワシュティは出て来なくて国中の大スキャンダルになってしまったことがありました。そんなワシュティに比べると、エステルの謙遜さが際立っているのです。

そんな強い印象を受けた後で、王はエステルが催す二日目の宴会の席に座り、こう語る。2節。「あなたは何を願っているのか。王妃エステル。それを授けてやろう。何を望んでいるのか。王国の半分でも、それをかなえてやろう。」これと同じことばは、今まで二度語られていました。エステルが許しがないうちに王の前に出たとき、そして最初の宴会の席で。ですから三度目になる。単なる挨拶ということではないと思います。エステルの謙遜さがどこから来るのか。その不思議さに目を奪われていったとき、王はまるで神がエステルに語りかけるように語っているのではないか。「さあ、勇気を出して心にある願いを言いなさい。大丈夫、心配しなくてよいから。」

3) 私の民族にもいのちを与えてください

エステルには、もう後はありません。ユダヤ民族を救うためには、ハマンを信頼している王に向かって、確かな証拠も示せないまま「ハマンは悪人です」と言わなければならない。殺されるかもしれません。そんなギリギリのなかでエステルは、まるで神が自分に語りかけてくれているような王のことばがけを聞き、それに力を得て3節でこう言う。「王様。もしも私があなた様のご好意を受けることができ、また王様がよろしければ、私の願いを聞き入れて、私にいのちを与え、私の望みを聞き入れて、私の民族にもいのちを与えてください。」

まるで地に頭をつけてひれ伏すようにへりくだって、「私にいのちを与え、私の民族にもいのちを与えてください」とひたすらに王のあわれみを願い求めようといたします。

2 王

1) エステルの告発をすぐに信じる

エステルの詳細を聞かされた王は尋ねます。5節。「そんなことをしようと心に企んでいる者は、いったい誰か。どこにいるのか。」エステルは答える。「迫害する者、敵とは、この悪人ハマンです。」

これを言ったら殺されるかもしれない。身を震わせながらエステルは王の答えを待ちます。そうしたらなんと、王は即座にハマンを悪人だと認めました。よほどのことがないとうちはならない。どうしてか。理由は二つあります。

一つ目は先ほども触れたように、すばらしい謙遜さを身につけていたエステルがいのちをかけて訴えているのを見て、王の心が揺り動かされ、それでエステルは真実を語っている確信した。しかしそれだけで王に次ぐ最高の地位に就いている人間をさばくわけにはいきません。やはり確かな証拠が必要です。それが、ここですぐにハマンを悪人と判断したということは、王は証拠をつかんでいるということになる。いったい、いつどこでつかんでいたのか。

2) 年代記を読んだとき

話しは、王が夜眠られずに記録の書、年代記を読んでいたときのことで、モルデカイに栄誉が与えられていない事実が発覚し、次の日にモルデカイに栄誉を与える手続きをしました。そこまではいい。問題は、こんな大事なことがなぜ今まで放っておかれたのか、です。当然、そのときの責任者は誰かということになる。誰だったか。ハマンだった。彼が故意に手続きをしなかった可能性がある。しかし詳しく調べる余裕がありません。

どうしようかと考えていたちょうどそこへやって来たのがハマン。6章6節で王はハマンにこう質問する。「王が栄誉を与えたいと思う者には、どうしたらよかろう。」どうして「モルデカイ」という名前を出さないのか、その時は不思議でした。たまたまではない。わざとこういう言い方をして、ハマンを試しているのではないですか。ハマンはそれに気がつかず、得意満面になって、ああしてこうしてと提案する。しかし王が「ユダヤ人モルデカイにそのようにしなさい」と語ったとき、ハマンは勘違いしていたことに気がつき、顔色がさっと変わって、動揺する。王はそれを見のがしません。ハマンが関わっているとの確証をつかみます。

3) 私の民族

けれどもまだハマンを罷免する理由にはならない。せいぜい、訓戒とか給与を減らすとか、そんな処分が終わるでしょう。決定的だったのは、3節のエステルのことば。「私の願いを聞き入れて、私にいのちを与え、私の民族にもいのちを与えてください。」

エステルは、自分がユダヤ民族に属する者であることを、これまで誰にも言ってこなかったのですが、ここで初めてここで明らかにします。普段なら、王はそれを聞いても関心がなかったでしょう。しかし今は違います。王はたった数時間前、自分の口でこう言っていたのです。6章10節。「ユダヤ人モルデカイにそのようにしなさい。」王は、自分のいのちを助けてくれたユダヤ民族に格別の信頼を置き、モルデカイは王が最高を栄誉を受けるにふさわしい人物であると認めた。ところが、ハマンはそのモルデカイを殺そうと柱を立てさせ、加えてユダヤ民族を根絶やしにしようと王の名前で法令まで出していた。これはもう言い逃れできない王への反逆です。ハマンは柱につるされていきます。

3 神

1) あわれみ

ここにある王とエステルのやりとりから、神とはどのようなお方なのか。二つのことを見ることが出来ます。

一つ目。王がユダヤ民族を救うかどうか、モルデカイもエステルも自分たちには決める事はできませんし、このことを王に要求する権利もありません。王の側にしてみれば、ユダヤ人を救わなければならない理由もありません。王がユダヤ人を救うかどうかは、ただ王のあわれみにすがるしかありません。モルデカイはそのことをよく知っていたので、「自分の民族のために王からのあわれみを乞い求める」それがエステルの役割だと言うほどでした。

神もこれと同じです。もともと神には私たちを救う義務はなにもないのです。また私たちも要求する権利もない。ところが、神はご自分のひとり子を私たちのところに遣われて十字架の救いを備えてくださったということは、ただ神のあわれみでしかありませんでした。

2) へりくだる者を通して

では神のあわれみはどんな人たちに注ぐのでしょうか。すべての人にですか。いいえ。残念ながらそうではない。ハマンは、ひらすら自分の栄

誉を求めて傲慢で、身を低くすることを知らず、気に入らないことがあると極端なほどに冷酷で、世界は自分の手で動かせると思い込んでいた。そのような人物がさばかれていきます。

その一方で、自分の栄誉を求めず、自分には力がない、何も誇るものはないと、ただひたすらに王のあわれみを求めて身を低くしたエステルとモルデカイにこそ、神はあわれみを注ぎます。

それは詩篇138篇6節にうたわれている神のお姿そのものです。「まことに主は高くあられますが、低い者を顧みてくださいます。しかし高ぶる者を遠くから見抜かれます。」

最初エステルは、こんな危険な橋を渡るつもりはありませんでした。しかし、モルデカイから「あなたが王国に来たのは、もしかすると、このようなときのためかもしれない」と言われたとき、エステルは、ユダヤ民族が救われるためには、だれかが代表して身を低くしていのちを捨てることによって、神の救いをもたらされるのだと悟り、自分の身を投げ出す決心をしたのに、祈ってもハマンを訴える証拠はエステルの手に入りません。ところが、既に神は王に御手を働かせて、ハマンの裏切りに気づくように導いておられた。そのことを知らないエステルは、ひたすらに身を低くしながら神の救いを待ち望みます。

このようなエステルを通して、主イエス・キリストのお姿が浮かび上がってきます。私たちが救うために、私たちに代わって謙遜になられ、身を投げ出しながら十字架におつきなされた、主を見上げながらまた歩んで参りたいと願います。